

【地域活性化フォーラム】

一人ひとりの死を集めて —おかざきまちづくり民俗誌の事始め— 愛知学泉短期大学 古橋敬一

要 旨

終末医療、あるいは地域包括ケアに関わる様々な人々の語りを聞き書きし、大学を起点としたまちづくりプロジェクトの調査を行った。この研究に取り組むに至った背景にある問題意識を明示し、それに見合う手法としての聞き書きとのつながりを論じた。また、実施した聞き書きの全体像とその一部を紹介し、考察を述べている。一人ひとりの人生への理解を通して、地域社会の在り方を問うという本研究の態度を示せたことは、今後の展開の基礎を形成することにつながった。

1. はじめに

大学を起点としながら、学生たちと共に活動できるまちづくりプロジェクトを考案するにあたって「聞き書き」によるフィールドワークを行っている。その事始めに選んだテーマが「終末ケアにたずさわる人々の仕事」である。

第1章では小論の全体像を示している。第2章では研究の背景にある問題意識について、第3章では研究の手法について、第4章は実際に行った聞き書きの結果と考察を示している。第5章は研究を終えての所感と小括である。

2. 問題意識

(1) 大学を起点としたまちづくりプロジェクト

私がまちづくりに出会ったのは、学生時代の2000年頃である。大学と中心市街地商店街が協働し、学生が主体となる「まちづくり拠点」としてのカフェを運営し、さまざまな活動を展開した(注1)。同時に大学院に進学した私にとっては、その活動が研究分野となり、やがて自分の仕事にも繋がっていった。大学と学生が地域のまちづくりに関わるプロジェクトはそんな私の原点でもあり、その意義と可能性は身をもって体験し学んできた。

しかし、一方で私はこうしたプロジェクトのさまざまな問題や課題とも向き合ってきた。問題や課題は、ケースごとに異なるため、どこの地域で、誰が何を目指すのかによる。つまり一概には言えないわけだが、わずかばかりの体験をふまえて、今回のプロジェクトについて考察してみると①短大の特徴②地域コミュニティとの連携③地域社会のニーズ、といった事柄に関連する問題や課題が見えてきた。

それらについて簡略的に述べると、①短大の特徴としては「2年間という期間の短さ」がまず目を引く。地域でのプログラムは、その内容にもよるが、ある程度の時間を要するのが一般的である。ゼミ単位での取り組み位を想定しても、一人の学生が地域に関われるのは、長くて1年あるかないかだろう。そうすると、単発的で短期的な関わりであっても、成果の出せるプロジェクトという制約も出てくる。

②地域コミュニティとの連携は、①にも関連するが、そうした短大の特徴を踏まえた先進事例を参照すべきだろう。例えば本学の生活デザイン総合学科の長谷川ゼミでは、地域企業と連携しその余剰在庫を活用したアクセサリ商品の開発などをSDGs活

動とも結びつけながら産学連携事業として展開している。このような地域コミュニティとのマッチングが、持続的で効果的な成果に結びつくが、そうした連携先を地域の中に開拓するには、やはりネットワークの構築が欠かせない。

③地域社会のニーズについては、それをまず知ることに加えて、それに対応できるシーズが学内や関わるネットワークの中に存在するのか、あるいは発揮できる潜在能力の水脈を探究していかなければならない。

大学を起点としたまちづくりプロジェクトを推進していくためには、少なくとも上記のような事柄を見据えていかなければならないのである。

(2) まちづくりにおける社会構造上の問題

加えて、まちづくりを取り囲む現代の社会構造についても若干触れておきたい。キーワードは「流動化」である。現代社会学の碩学とも称されるジークムント・バウマンが『リキッド・モダニティ』を示したのは2000年。既に20年以上前になるが、「流動化する現代」における「新しい個人化」という指摘は、今なお現代の日本社会を読み解くキーワードとしても通用する。

近年は、SNS等によるコミュニケーションツールの発達など、IoTの影響も手伝って、コミュニティの流動化が益々加速している。現代における私たちの暮らし方や働き方は、バーチャルリアリティーをも巻き込みながら流動化の一途をたどっていると言っていいただろう。つまり、仕事、学校、買い物、趣味、遊び等の領域が拡張しており、一つの地域では個人の人生は到底収まらない。一方、物理的にも当然ではあるが、そうしたライフスタイルが拡張していくと、住んでいる地域の人間関係は益々希薄になっていく。現代の都市生活者は、自分の地域のまちづくりに関わりづらい社会構造の中に知らずと置かれているのではないか。私に至っては、まちづくりが専門でありながら、自分の住んでいる地域のまちづくりには、ほとんど関りが持てていない。これはお粗末かもしれないが、偽りのない現状である。

「新しい個人化」についても、最低限だが触れておきたい。三上(2017)によれば、今や私たちは、「自分が何者であるか」を規定するアイデンティティの探求、いわゆる「自分探し」さえままならない状況にあるという。そもそも個人が自己を確立していくためには、自分が所属するコミュニティや社会的な関係から価値・規範・目標などを取り入れる必要があるが、しかし流動化が著しい現代においては、自らの所属先をソリッド/固定化することが現実的ではないという状況は確かに否めない。また、これに対し、私たちはその都度の状況に合わせ「自己をコーディネートしている」という三上の指摘には大いにうなずける。「自分探し」による個人化もままならなかった私たち日本人は、さらなる「新しい個人化」への対応に追われているのが現代の状況と言える。そして、それさえもまだ「道半ばの混乱の中にある」というのが私たちの現在地ではないだろうか。

地域主体のまちづくりが重要なことに異論はない。その「主体」を該当する地域コミュニティで暮らし働く人々の中から発掘し、育てていくことも重要である。しかし、そうした人々こそが社会構造的な矛盾の中を生きて働いている。そのことは、もはや無視することのできない前提なのである。ポイントは、単にあるべき論を掲げるではなく、現状を冷静にとらえながら、かつ理想をいかにして実現していくのか。現実的なアプローチを行っていくための折り合いやバランスが問われていると言えるだろう。

(3) 「聞き書きプロジェクト」の可能性

上述の事柄をふまえつつ、大学を起点としたまちづくりに取り組むのであれば、どのようなアプローチが現実的、あるいは可能であるのか。そのヒントとして、私が現

在試行的に取り組んでいるのが「聞き書きプロジェクト」である。

「聞き書き」が教育プロジェクトとして知られるものに「聞き書き甲子園」というのがあつた。全国から選ばれた高校生たちが、日本のさまざまな地域の森・川・海などで活躍する職業名人を訪ね一対一で聞き書きするプロジェクト（注2）である。インタビューする高校生たちに学びがあることはもちろん、インタビューを受ける側も自信を回復し、大きな励みを得ることなどが報告されている（注3）。また、その成果が貴重な記録となり、失われていく職業を次世代につないでいくためのツールにもなっている。それが、地域活性化と親和性があることは想像に難くないだろう。

また、私も前職において「聞き書きプロジェクト」をまちづくりの中で実践し、そこからまちの民俗誌を記述する取り組みに関わつてきた（注4）。その体験からしても、聞き書きは、まちづくりにも極めて有効なリサーチであるし、有意義な出会いをつくる、すなわちネットワーク構築の現実的なアプローチとなり得ることを実感していた。

そのようなことから、この岡崎市、あるいは本学周辺地域という新天地においても、この手法を用いたアクションリサーチを重ねることで、私に関わる今回のプロジェクトの在り方が浮き上がってくるのではないかと考えたのである。

悩んだのは「聞き書き」するテーマであつた。問題意識として念頭にあつたのは、私が授業を担当する「キャリアデザイン」に関する事柄であつたが「仕事や働き方」というだけでは、まだ切り口が漠然としている。そこで設定したテーマが「終末ケアに関わる人々の仕事」という今回のテーマであつた。「仕事や働き方」からすると、随分と踏み込んでいる印象もあるが、踏み込んでいる方が「仕事や働き方」の話もより具体的で鮮明になるかもしれないという推測もあつた。

また当然、このテーマ設定には、いくつかの伏線がある。一つには、現代の地域社会が抱える様々な問題の背景には、人口減少、少子高齢化といった問題が密接に関わっていることが挙げられる。前職の聞き書きでも「生老病死」に関わる事柄は、日常的なテーマであつた。特に「死」に関しては、7割が病院死という統計結果（注5）もあり、地域社会の日常からは遠ざけられ、忌み嫌われる事柄にカテゴライズされた状態がつづいている。しかし、本来、私たちが「死」を垣間見ることは、自分たちの「生」つまり生き方を省みる、あるいは見つめ直す上での大切な機会になり得るものだ。私たちの社会は、人口減少に突入しており、これからますます「死」に係る問題が増加していく。にもかかわらず、「死」を直視せず一方的に遠ざけることは、危険であるし大きな損失ではないかと推察する。ともあれ、先ずは問題化よりも、現状を知ること、現実には起きている出来事を把握することから始めたいと考えた。

また加えて、個人的にも、身近な親類の終末ケアを体験した際に、その現場で働く人々の所作に感銘を受けており、それに携わる人々の動機や実際の話をもっと聞いてみたい、知りたいという知的好奇心もあつた。またさらに調べてみると、有効求人倍率からみても介護関係の職種には地域の大きなニーズであるようだ（注6）。しかし、裏を返せば、現在は介護関係の職種には興味関心が寄せられる割合が低く、避けられがちな職種であるという現状もわかつてきた。

以上、聞き書きのテーマを絞りすぎる必要はないが、切り口が全くないわけにもいかない。まさに仮置きのではあるが「終末ケアに関わる人々の仕事」というテーマを設定し、当該地域の終末ケアに関わる人々のネットワークを頼りにそれぞれの仕事や働き方を探ることとした。

3. 手法

(1) インタビュー

インタビューイ探しは、本学の生活デザイン総合学科の木村学科長を頼り、そのネットワークをご紹介いただくことから始めた。正直に言えば、この取り組みを地域活性化やまちづくりという文脈の研究プロジェクトとして説明し、ご理解をいただくことは難しいのではないかという予感もあった。しかし、木村学科長の理解は私の予想に反して迅速かつ的確であった。すぐさまご紹介いただいたのが、岡崎市のケアマネジメントの事業所を経営する近藤美香さんであった。彼女からは、ご自身の体験と合わせて、1名の看取りの体験者、1名の看護師をご紹介いただくこととなった。またさらに、本学同学科の大森有希乃先生にもご協力を仰ぎ、こちらもご自身の体験と合わせて、2名の介護施設職員をご紹介いただき、お話を伺うことができた。また、大森先生へのインタビューには、本学同学科1年の那須美月さんにも同席してもらった。今回は、5名程度のインタビューを想定していたが、結果的には、5組7名の方々にご協力いただいた。

インタビューは、基本は1体1であるが、これも今回は決め過ぎず、状況に応じて、私以外の方々にも同席し参加いただいた、この意義や課題についても後に整理して述べてみたい。

私がこれまでにまちづくり活動の中で実施してきた「聞き書き」においては、現在進行形の活動の中で出会う人々が対象であり、その成果を活用したその後の展開も考慮していたため、そのほとんどの記録は、実名で記録してきた。しかし、そこには当然配慮も必要であるし、制約も生まれる。しかしながら、その中で最善を尽くして残せるものを残していくことが重要であるとも考えている。こうした配慮等は、よくよく考えれば、実名も仮名も基本的には同じことであると言えるのかもしれない。いずれにしても今回も、基本的にはそのスタンスを守り、インタビューをした事柄で記録として残す資料やその公開に関しては、細心の注意を払って、ご本人への確認を行った。

(2) 記録

インタビューは、いずれも1時間半から2時間程度である。使用した録音機材である「オートメモ」は、今回より初めて使う機材で、自動的にAIが文字起こしをしてくれる機材を使用している。これは、非常に便利であるが「聞き書き」という行為の重要な「聞いたことを書き起こす」というプロセスにAIが介入することの是非については、判断を棚上げしたまま使用していることも明記しておく必要があるだろう。あくまでも私のケースであるが、1時間半程度のインタビューでは、おおよそ3万字、原稿用紙にすれば75枚程度の文字量となる。しかもなるべく質問項目を絞り過ぎないで交わされた筋書きのない会話が羅列された状態の文章を、ある程度読める状態にするのは、やはり再度音源を聞き直しながら校正する必要がある。それを経て、素材は、初めて「活用できる記録」として目的に合わせて使用できる状態になる。料理に例えるなら、下ごしらえに当たる部分だが、ここをどのようなやり方で実施するのかが千差万別で、実際の手順やスキルも人によって異なるのではないだろうか。つまり、続けて料理で例えるなら、泥付きの野菜を自ら洗って包丁で刻むのか、お手伝いに頼んでフードプロセッサで微塵切りさせるのかというような違いがある。当然良し悪しがあるし、状況と目的によって変わるし、必要なスキルやツールも変わってくる。私は、この新たなツールを使いこなしていくスキルを磨きたいと考えている。はるか遡れば、口述から記述に変わったり、テープレコーダーが誕生したりする度に、何かが失われ、何かが加わってきたことは間違いない。フィールドにおける方法論そのものを固定化

せず、状況と目的にあわせてオリジナルの手法を組み立てて行くことが重要である。

私の場合、これまでは記録したインタビューをアウトプットする媒体がある程度固定的であったため、それに合わせて下ごしらえそのものも必要ないプロセスは省きがちであったが、研究という場合に適しているやり方については、再度検証しなければならないと考えている。

インタビュー記録の残し方について、今回は話し手やその時々状況に合わせて、様々な方法をフレキシブルに試してきた。結果的には、一つのインタビューに対し、①録音素材（AI の書き起こし文章）②書き起こし原稿（この時点で非公開情報は削除）③民俗誌原稿（目安 7000 文字程度）という 3 つを基本とした形式に辿り着いている。これもまだパイロット的であり、今後は改良されていくであろう。また③民俗誌原稿については小冊子としてとりまとめている。ご関心のある方にはぜひご一読いただきたい。

（3） 文献

今回は、それぞれの方々へのインタビューと同時に数多くの文献を読み解くこととなった。途中、看護師で写真家の方の看取りの現場をテーマにした現代アートの展示（注7）にも足を運んだ。そのようにして文献等の調査を進めながら、インタビューで聞いたことを反芻し、その意味を再帰的に問い直しながら記述をすすめた。以下には、端的に参考にした文献のレビューを記述しておく。

『忘れられた日本人』は、日本民俗学では最も知られている宮本常一の名著である。私は「聞き書き」あるいは「民俗誌」の書き方を、こうした文献から学んできた。導入はどう書くのか、会話はどう扱い、その際考えたことはどのように表現するかなど、宮本の著作の中でもそうした手法は、作品ごとに異なる。それを自らのケースに当てはめながら、真似ぶ、見て試す式で格闘しながらやっている。まちづくりは、学問としては学際的であり、さまざまな領域を横断する。民俗学的アプローチは、その一つであるし、宮本は傑出した地域振興の仕掛け人でもあった。その足跡には学ぶべき視点が数多くあると考えている。

『アンダーグラウンド』は、村上春樹が地下鉄オウムサリン事件の被害者を中心に 62 人の人々のインタビューを記録したノンフィクションの文学作品である。同事件は、1995 年に日本のみならず世界を震撼させたテロ事件として知られるが、それに関連して巻き起こった日本社会の中の様々な現象を被害者へのインタビューという形で描きながら、日本社会の闇そのものを追究している。ここに書かれていることは、近年のコロナ禍における自粛警察等の日本社会特有の諸問題に通じるものがあり示唆的である。専門家の分析的視点を活用した論理的分析ではなく、名もなき市井の人々の体験、その声を丁寧に集めながら、書き手の中に形成されていく集合知を記述していく手法は大いに参考になる。

『ワーキング！仕事』は、S. ターケルによって 1960 年代後半のアメリカで働く 133 人の人々の日常や仕事の話を集めて書かれた。こちらは、仕事を切り口にした社会批評であり、アメリカンドリームの本質を見事に描いている。一人ひとりの声を「社会理論とか文芸作品」という形ではなく、それぞれの言葉のままで掲載している。聞き書きによる作品の醍醐味は、使われている文章が、会話を通した相互理解を基本としているため平易かつ読み手にさまざまなことを想起、思考させる効力が高いことではないかと考える。もちろん、そこに聞き手であり書き手である人間が介在している以上、編集は存在する。しかし、その在り方はその他の文章とは明らかに異なる。この手法は、当時に大きなセンセーショナルを巻き起こし、帯を書いた L. マンフォードなどの知識人も驚嘆の声を寄せる名著となった。またその影響は現代にも少なくないも

のがある（注8）。

「終末ケア」というテーマに関連して、手にとった文献もいくつかある。『死を生き来た人々』は、森鷗外の孫である小堀鷗一郎による執筆である。小堀は食道癌の専門医として40年の現役から退職した後、再就職した地域医療の現場で自らの治療方針を転換し、訪問診療医として数百人の患者の看取りに関わってきた。現代日本では、自宅で最後を迎えたいという患者の望みを実現させることは非常に難しい。制度上は医師の診断のない死は警察の検視対象でさえある。「多くの人々が死を忘れたことがすべての根底にある」という小堀の言葉は重い。現在は、日本の終末医療が、在宅治療と在宅看取りへと切り替わって行こうとする転換点である。その現場の訪問医の視点は、非常に重要であるが、それを知る機会は貴重であろう。本書からは、死が「普遍的」ではないこと、死に対しては初心者として共に考え抜くことが重要であるなど、インタビューで聞き知る現実を受け入れていく際のさまざまな態度や視点を学んでいる。

また『驚きの介護民俗学』も本研究には示唆的である。著者の六車由実は、民俗学者であり、大学教員を辞した後に介護の道に入り、施設職員として働く現役の介護職員で、現在はグループホームの管理者である。この作品には、六車の職場である老人ホーム施設の現場で、民俗学者が介護職に挑戦し、そこで出会う人々との交流の様子がエスノグラフィー形式で綴られており、民俗学的アプローチによって、介護の現場の魅力や高齢者介護に関わることの豊かさが次々に示されていく。民俗学には、他者が生きてきた具体的な人生に学び、自分や自分たちを再考していく視点がある。これは、現代のまちづくりにおいても重要な視点である。

以上、主要な文献を挙げたが、その他の参考文献については、文末に記したい。いずれも、先行研究として文献を整理し、それを超える視点を見出して実証するというような研究アプローチとは異なる。インタビューを経て、それをとりまとめながら、文献を読み漁り、またインタビューへと戻る。その反復の中で書きながら読みながら思考することを繰り返す中で、現実を受け入れ理解する、あるいは書き記すためのヒントを探る。そんな愚直な遅々たるアプローチをとっている。

4. 結果と考察

（1）インタビュー結果の全体像

今年度の研究では、5組のインタビューを行い、うち4組のインタビューを5本収録した小冊子を100部制作することができた。4組で5本となったのは、インタビューの分量と掲載字数上限の問題で、その内の1組が前後半に分けた2本立てとしたため、5組目のインタビューは、次回の掲載に見送ることにした。5組はそれぞれ①大学教員／元管理栄養士②施設職員2名③ケアマネジャー④お看取り体験者⑤訪問看護師である。このうち①から④までのインタビューを冊子化した。

いずれも、現場やそれぞれの業務等が多忙な中、また「死」や「看取り」という扱いづらいテーマに対し、率直な意見、経験者ならではの貴重な見解をご提示いただき深く感謝している。

（2）インタビュー結果の考察

ここでは、紙面にも限りがあるため、今回の5組のインタビューの中で、最初に実施した①大学教員／元管理栄養士のケースについての考察を述べる。今回の研究の中では、考察や分析が足りていないことは、最初に述べておかなければならない。しかし、まだ研究は続いていく。小冊子の活用も含め、さらなる探求を進めていくことは、今後の大きな課題の一つである。

a) ①大学教員／元管理栄養士へのインタビューの概要

ここでのインタビューは、本学の同僚である大森先生である。以下に、インタビューの概要を端的に紹介する。

ある時、私が立ち話で、今回の研究の概要を大森先生に伝えたところ、「私、には自信があったんです」という言葉が返ってきた。最初は、あっけにとられてしまったが、よく聞けば、大森先生は元管理栄養士。特別養護老人ホームにて14年も働いてきた経験があり、さまざまな介護食のレシピ開発をし、また実際につくってきた専門家であった。しかし、ご自身の母親の介護では、その専門性を発揮することが叶わなかった。大森先生の母親は、倒れた際に脳機能に障害が残り、食べる意欲を喪失、大森先生と残された家族は、母親が生き残る道として、を選択し、介護が始まる。

大森先生は、胃瘻という選択の悲惨さを専門的な立場から良く理解していたが、まだ75歳という若さで食べ物が喉を通らなくなってしまった母親に対して「死」を選択することがどうしてもできなかった。そして、その生き残った時間をできるだけ豊かにできないかと外出やリハビリを試みるが、ことごとく裏目に出てしまう。既に亡くなっていた父親の七回忌に、親戚一同で集まるという機会には、外泊ができた母親は、孫たちの姿に喜ぶ笑顔を見せたものの、そうした機会は一度きりであった。最後はコロナによって隔離された病室の中で母親は他界してしまう。大森先生曰く、「もし、母が話せて、意志もきちんと示せたとして、胃瘻したいって言ったかなあ？」というのが、今でも残された家族の中で続いている問いかけであった。

b) 管理栄養士という仕事についての語りを引き出したもの

このインタビューには、本学の学生である生活デザイン総合学科1年の那須さんが同席をしている。考察の一つとして、ここでは、彼女という学生の存在が果たした役割について述べる。

ある時、私の研究室を訪れた那須さんに、興味深い授業や先生はいるのかという質問を投げかけた際に、大森先生の名前があがり、那須さんは大森先生のことを尊敬しているのだと教えてくれた。しかし、その理由を尋ねても上手く答えられない様子だった。そこで、私は彼女を今回のインタビューに誘った。直観は働きつつも、それを表現する手段がまだ伴わない部分に、逆に私は彼女の潜在的な可能性を感じ取ったことが理由である。

いざインタビューが始まってみると、大森先生の話は管理栄養士という職業をなぜ選んだのかという学生時代の目標というトピックから始まり、最初の就職先であった大学病院での苦労や悩み、また精一杯取り組んだことや、それを通して何を学んだのかなどの貴重な就労体験にまで及んだ。現代を生きる一人の女性が社会人として働くことの現実を、実に幅広く具体的に語っていただいた素晴らしい内容だった。

誤解を恐れずに言えば、私はこのような話が聞けることを全くと言っていいほど予想していなかったし、またそのようなお願いもしていなかった。おそらく大森先生にしても、そのような心づもりはなかったであろう。さらに言えば、同席した那須さんにしても、どんな話が聞けるのかはわからなかったであろうし、具体的な質問をしたわけでもなかった。しかし、結果的にではあるが、私はやはり那須さんの存在が大森先生のこの語りを引き出した決定的な要因だったのではないかと考えている。

那須さんはインタビューの間、只ひたすらに耳を傾けていた。あるいはそれしかできなかったとも言える。大学教員が、その生き方や働き方、さらには肉親の死について真剣に語る姿を前にして、言葉が出ないのは当然でもある。しかし、にもかかわらず（あるいは、だからこそかもしれない）その那須さんの真摯な態度は、大森先生の話をもより深く、些細な部分までよく引き出していたように見えた。

しばらくの後、改めて那須さんにも尋ねてみたが、やはりインタビューの感想を簡潔に表現することはまだ難しいとのことだった。しかし、彼女はインタビューの校正や私の思考を整理することに非常に積極的に尽力してくれた。その「主体性」は教員が学生に求める社会人基礎力の重要な一つであることは言うまでもない。インタビューを通し、彼女の中に育ちつつものがあることは間違いないだろう。そうした彼女の姿から、今後の学生との協働を考える際の大きなヒントを得ることができた。

c) 「死」を受け入れる

そして、大森先生の管理栄養士としての働き方や生き方についての語りが聞けたことで、経験を積んだ専門家や介護関連の従事者であったとしても、近い人の「死」を受け入れることは決して簡単ではないというシンプルな事実が、よりリアルに感じられることとなった。少なくとも私は、インタビューの中でも、そしてその後においても、この避け難き、受け入れ難き事実はどう反応して良いのかわからないまま今に至る。この受け入れ難きを受け入れるしかない現実を避けるのではなく、受け入れることを通して、私たちはその意味を繰り返し、繰り返し考えていくのだろう。そう考えた時に、その体験をされた方の史実を何らかの方法を通して共有していくことは重要な意味を持つであろう。

「死」を考えることは「生」を考えることである。あるいは「死に方」を考えることは「生き方」を考えることである。同様の意味の事柄は、多くの人が語るところである。では「死を受容すること」についてはどうであろうか。これも同じく「生を受容すること」に結びつくのだろうか。あるいは「生を受容すること」とはどういうことだろう。現代では「親ガチャ」という言葉にもあるように、自らの出生を選べない現実をアイロニカルにとらえる風潮も聞く。私たちは、生まれてくるときに親を選べない。同じく、時代も場所も選べない。それが現実にも関わらず、私たちはその現実をなぜか不条理だと感じてしまうのである。この「なぜか」は、答えがある類の問いではなく、問うことでさまざまな考察や解釈を促進させるものであるのだろう。

私たちは「生」も「死」を簡単には受容できない。受容するより他ないにも関わらず。しかし、だからこそ、その理由や意味を考えていく。その問いに向き合うことは時にしんどく、できれば避けて通りたい。そうすることが場合によっては処世術であることもある。しかしおそらく、この問いに向き合うことでしか得られない豊穡もあるのではないだろうか。一人ひとりが、そうした現実と向き合いながら、それぞれの「生」と「死」を受容するプロセスが人生であり、その総体が、地域であり社会であるのだろう。私はその姿を、一人ひとりの人生の側から見つめていきたいと考えている。

5. おわりに

本研究には、結論めいたものがない。大変恐縮ではあるが、まだ何かを結論づける段階には至っていないのである。敢えて言えば、今後もこの取り組みを地道に続けていくことが重要であるという決意が益々強くなったというのが、私の偽らざる現在の所感である。

現代のまちづくりには、特に若い世代である学生たちが、自分の地域に関わることの社会構造上の難しさがあることは、本文でも述べた通りである。しかし、一方で地域は若者を必要としているし、何かしらの地域やコミュニティを離れて、私たちの生活や仕事が成り立たないのもまた確かである。そうした中で、一人ひとりが、どのようにして地域に関わっていくのかを見出していくことが、これからの時代にはとりわけ重要になってくるのだろう。

誤解を恐れずに言えば、「生」にも「死」にも特別な意味はないだろう。しかし、私たちが、その意味を敢えて考えることには意味がある。流動化が益々激しくなっていく現代の中では、人間はますます孤独になり、地域社会から切り離されていく。つまり、そこに所属する必要性が失われていく。それは事実である。しかし、だからこそ、私たちは自分たちでその意味を考えて、創り出していく必要があるのではないか。この小さな取り組みは、まだ端緒についたばかりである。

注

- (1) 詳しくは古橋（2012）を参照。
- (2) 農林水産省、文部科学省、環境省、国土緑化推進機構、NPO 法人共存の森ネットワークで構成する「聞き書き甲子園実行委員会」が主催している。
- (3) 安藤・興柁（2014）などを参照した。
- (4) 愛知県名古屋市の港区の西築地学区エリアにおいて活動する港まちづくり協議会の活動の一環として実施した。プロジェクト名は「み（ん）なとまちのアーカイブプロジェクト」である。
- (5) 厚生労働省による人口動態調査によれば、2004年のピーク時には約8割、2019年には約7割の方々が病院で亡くなっている。
- (6) 厚生労働省の愛知労働局が実施する「最近の雇用情勢等（有効求人倍率）」には、職業別の有効求人倍率が示されており、事務が0.52%と1割を下回っているのに対し、介護関連の職種は4.78%という高い数字を示している。
- (7) 2023年1月8日から22日にかけて名古屋の写真ギャラリーPHOTO GALLERY FLOW NAGOYAにて尾山直子（看護師・写真家）と神野真実の共同で開催された写真展「ぐるり。」
- (8) 近年、稀にみる1200頁を上回る聞き書きの書籍である『東京の生活史』の編者である社会学者の岸政彦も、S.ターケルの仕事に大きな影響を受けていることを述べている。

参考等文献（本文に引用箇所明記がない文献用）

- ・古橋敬一『地域創造の視点と実践』名古屋学院大学、2012
- ・ジークムント・バウマン（森田典正訳）『リキッド・モダニティ—液状化する社会』大月書店、2001
- ・三上剛史「個人化論—個人と社会は“結びついて”いるのか？」『TASC MONTHLY』公益財団法人たばこ総合研究センター、2017、13—19頁
- ・安藤愛・興柁克久「森林環境教育としての『聞き書き甲子園』の社会的意義とその効果」『日本森林学会誌』96巻3号、一般社団法人日本森林学会、2014、123—131頁
- ・宮本常一『忘れられた日本人』未来社、1971
- ・村上春樹『アンダーグラウンド』講談社、1997
- ・S.ターケル（中山容他訳）『!』晶文社、1983
- ・小堀鷗一郎『死を生きた人びと』みすず書房、2018
- ・六車由実『驚きの介護民俗学』医学書院、2012
- ・岸政彦編『東京の生活史』筑摩書房、2021
- ・P.ブルデュエ編（荒井文雄・桜木陽一監訳）『世界の悲惨』藤原書店、2019
- ・清水展・飯島秀治編『自前の思想』京都大学学術出版会、2020

謝辞

本研究は、岡崎大学懇話会令和 4 年度産学官共同研究の助成を受けて実施したものです。岡崎大学懇話会に厚くお礼申し上げます。また今年度の幹事校で事務局を担当いただきました本学の教職員の皆様にも大変感謝しています。そして、インタビュー等にご協力をいただいた、大森有希乃先生、木村典子先生、近藤美香さん、酒井友梨香さん、竹内己智子さん、手嶋寛人さん、那須美月さん、森下さやかさんのおかげでこの研究に着手することができました。本当にありがとうございました。